

方言における原因・理由の接続詞概観

小西 いずみ

1. 共通語の接続詞「だから」とそれに対応する方言形式

共通語において、接続助詞「から」を用いた《原因・理由節＋主節》文の多くは、接続詞「だから」を用いた二つの文に言い換えることができる。

(〔 〕内は、前田ほか(2006)の意味分類と項目番号)

- (1) a. 毎日雨が降るから、洗濯物が乾かない。[事態の原因I-1-1]
b. 毎日雨が降る。だから、洗濯物が乾かない。
- (2) a. 星が出ているから、明日もいい天気になるだろう。[判断の根拠 I-3-1 a]
b. 星が出ている。だから、明日もいい天気になるだろう。
- (3) a. 風邪をひくといけないから、厚着をして出かけなさい。[発言・態度の根拠I-4-2]
b. 風邪をひくといけない。だから、厚着をして出かけなさい。
- (4) a. すぐにもどってくるから、ここで待っていてくれ。[理由を表わさない用法 I-5-1]
b. すぐにもどってくる。だから、ここで待っていてくれ。

上の例では「だから」を用いた文はやや冗長に感じられるが、原因・理由にあたる事態が複数の文で表されている場合は、「から」が用いにくく、「だから」が用いられやすくなる。また、対話において、相手の発話内容に含まれる事態からの帰結を述べたり帰結を求めたりする場合には、接続助詞「から」による複文は成り立たず、「だから」が用いられる(蓮沼 1991, 前田ほか 2006)。接続詞「だから」は、少なくともこれらの点において接続助詞「から」とは異なる機能を持つと言える。

- (5) 世間。どうやら自分にも、それがぼんやりわかりかけて来たような気がしていました。個人と個人の争いで、しかも、その場の争いで、しかも、その場で勝てばいいのだ、人間は決して人間に服従しない、奴隷でさえ奴隷らしい卑屈なシッペがえしをするものだ、だから、人間にはその場の一本勝負にたよる他、生き伸びる工夫がつかぬのだ、[人間失格]
 - (6) 「おかしな子だねえ。あの子は、そんなことを考えていたのかい」「だから、わたしからも離れていったんですよ」[冬の旅]
 - (7) A: 「大変だ。雨が降ってきた。」
B: 「だから どうしたと言うの? / だから 何なの? / だから ?」 [前田ほか2006: III-2-2-1]
- 他地域の方言でも、同様の意味・機能を担う接続詞を発達させている。

- (8) うそちけば、必じ後がに、祟りっコ 来らったでや。したんて、うそちぐもんで無や
 でや(嘘をつけば、必ず後で、祟りが来るのだよ。だから、嘘をつくものではない
 よ。) [秋田県二ツ井町。日高 2000:130]
- (9) こりゃ嫁さんが死んでから蛇に生まれかわって姑と小姑にしかえしに来たがやとお。
そっじゃけで人間ちゃのお悪いことするもんでぢゃないちゃ。(これは、嫁さんが死
 んでから蛇に生まれ変わって姑と小姑に仕返しに来たんだって。だから、人間はね
 悪いことをするものではないよ。) [富山県小杉町。伊藤 1971:77。訳は小西]
- (10) アイスクリン ウツタ、アレガ アンサン アノジブンニ イッセンカナー ゴリ
 ンカ ソンナンデシタヤロ (m エーエー エー) ソノジブンニ、ニジューゴセン ト
 リハリヤンノヤガナ (mソーデスカ) ソーデスヨツテニ ヨッポドノナー オヒト
 ヤナイトナー イキャハリセンノダス サー。(アイスクリームを売ってた、あれが
 あなたあの頃、1 銭か、5 厘かそんなものだったでしょう。その頃に 25 銭お取りに
 なるんですよ。そうですから、余程のね、お方でないとね、いらっしゃいませんの
 ですよ。) [大阪府大阪市。日本放送協会 1966:203, 井上 1995:119]
- (11) B:ソーヨ ヘコ° ーナ モノ バッカシ クテ ムカシノモナー マー ユータラ (A
 ン) ドンナー コタ ドンナケンド ソレガ ソー セニヤ クテイケザツタキ イ
 カンケンド エー モナ ウツテノー(A ソー ン) ヘコ° ーナ モノ バッカリ ク
 テ (A ソー ソー) ヤツテイトーヨ。(そうよ 粗悪な もの ばかり 食べて 昔
 の者は まあ 言ったら 馬鹿な ことは 馬鹿だけれど それが そう しないと 食
 べていけなかったから いけないけれど いい ものは 売ってね 粗悪な もの ば
 っかり 食べて やっていたよ。)
- A:ソー (B ン) マー ソレヂャキニ ザイサンカ° デキツローデ? (うん ま
 あ それだから 財産が できただろうよ)

[高知県高知市。国立国語研究所 2003:162-163 段]

各地域方言の原因・理由の接続詞の記述においては、その形式の語形成と意味・用法の広がりとは主な着目点となる。以下で、この二点についてもう少し詳しく述べる。

2. 「だから」相当形式の語形成

諸方言にどのような原因・理由の接続詞が分布するかについては、国立国語研究所(1983)『方言文法全国地図』(以下、GAJ)第1集第34・35図によって、その概略を把握することができる。調査文は「孫に、注意したのに間違いをおこしたので、『だから、するなど言ったじゃないか』と言うときの『だから』のところはどのように言いますか」というもので、第34図が「だから」の「だ」相当部分、第35図が「から」相当部分の図となっている。第35図を見ると、「から」相当部分の形態のバリエーションは、ほぼ接続助詞「から」を扱った第33図に一致している。そこでこの「から」相当の接続助詞の相違を捨象して作成

した略図を、図1として示す。この図では、ソレ・ソー・ホンなどのソ系指示詞で始まる形式を塗りつぶした記号で、ソ系指示詞がない形式を白抜きの記号で表わしている。

この図および原図から次のことが指摘できる。

- (i) 全国的には、共通語ダカラと同じ《断定辞+原因・理由の接続形式》という語形成のものと、《ソ系指示詞+断定辞+原因・理由の接続形式》という語形成のものが広く分布する。前者の分布域は、関東から中部の一部（ダカラ、ダデ、ダスケアなど）、中国から九州東部（ダケー、ジャケー、ジャキー、ジャッデなど）、琉球（ヤクトウ、アッシジャンカラニ、など）などで、どちらかと言えば後者の分布域のほうが広い。一般に、《断定辞+原因・理由の接続形式》は、《ソ系指示詞+断定辞+原因・理由の接続形式》より成立が遅く、接続詞としての語彙化の程度が高いと言える。江戸語・東京方言においても、江戸後期にソレダカラからダカラへ移行したことが知られている（3.1節を参照）。なお、図1では、東北から関東北部にかけて分布する「ンダガラ」「ンダガラ」「ンダサゲ」などの形をソ系指示詞を持つタイプに含めたが、「ダ」の前の撥音あるいは入り渡りの鼻音として指示詞の痕跡が残っているに過ぎず、断定辞から始まるものにかなり近い。
- (ii) 東海地方には、「(ソレ)ダモンデ」「(ソレ)ダモンダデ」などが混じる。これらの形式で接続助詞相当の位置に現れる「モンデ」や《モン+断定辞+『から』相当接続助詞》は、GAJ 33 図「雨が降っているから、行くのはやめる」になく、37 図「子供なので、分からなかった」のみに現れるもので、中部地方に比較的まとまって分布する（彦坂 2005）。「モンデ」や《モン+断定辞+「から」相当接続助詞》が 35・36 図で接続詞の形成要素としても現れることは、その分布域においてこれらの形式が原因・理由の接続形式として高度に慣用化されたものであることの傍証となる。
- (iii) 断定辞ではなく動詞「する」に「から」相当の接続助詞を後接させた形式も見られる。一つは北海道沿岸部や東北の一部（青森など）にある、「シタ」で始まる形式「シタガラ」「スタハンデ」などである。もう一つは、意味的に「そう」「そのように」に相当する指示副詞に動詞「する」が続いたもので、琉球の宮古諸島にこれにあたる形式（アンシバドゥなど）がまとまって分布する^{注1}。
- (iv) 東海地方（岐阜など）と九州西南部（熊本・鹿児島）には、「それで」類が分布する。また、九州西北部（福岡・佐賀・長崎）には「ソレセン」など、少なくとも表層的にはソ系指示詞に直接「から」相当接続助詞が付いたように見える形式がある。ただし、もともとは、断定辞や「する」など何らの用言を伴っていたものが縮約した可能性がある。

接続詞の語形成に関しては、文接続詞全体においてある程度体系性が見られることが予想される。特に、逆接条件を表す「けど」は、最前部にソ系指示詞をとるか否かという点で共通した形式を持つことが予想される。GAJ 第1集 39 図は「けど（行かなければ

ならない)の「けど」部分の地図だが、資料一覧からは「だけど」部分全体の形も知ることができる。ほかに事態の継起・累加関係を表わす接続詞「それなら」「そうしたら」「そして」「それで」、話題の転換を表わす「(それ)では」なども、共通語ではソ系指示詞に断定辞や動詞「する」が続くという語形成のものだが、方言によってはそれらにおいても共通語とは異なる形式が使われる。例えば、秋田方言では、「シタガラ」「シタンテ」(=だから)、「シタドモ」「シタバツテ」(=だけど)、「シタバ」「シタツキヤ」(=それなら・そうしたら)、「シテ」(=そして)、「シェバ」(=そうすれば、では)のように、動詞「する」で始まる文接続詞が発達しているようである(日高 2000:128-132)。

3. 「だから」相当形式の意味・用法

3.1 共通語・東京方言のダカラ

共通語・東京方言のダカラは、対話において、次のような接続詞とはみなしがたい用法を持つ(蓮沼 1991, 岡本・多門 1998, 甲田 2001, 小西 2003 など)。

(12) 「実はその……困った事になっちまって……」

「何が？」

「何がって、^{はなは}甚だ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」 [吾輩]

(13) 夏子「君のことは穴山さんから聞いたわ」

秋平「ああ」

夏子「学生相撲っていったって大した事ないから安心しなさい。うちの相撲部は三部リーグのビリッケツ。つまりうちより弱い相撲部はこの世にないの。(略)」

秋平「ビリッケツって言ったって、相手はちゃんとした相撲部だろ。殺されちゃうよ」

夏子「だから安心しなさいって言ったでしょ。三部リーグはどこも似たような状況なの」 [シコ]

こうした非接続詞的なダカラは、ダカラ以下で述べる内容が既述であったり、既述の内容から容易に推論できるものであったりする場合に用いられることが多い。ダカラに続く発話内容が「聞き手にとって既知のものであるはず」という話し手の発話態度を示すものと解釈できる。上の(12)の例は、“P[お前が「困った事になった」と言う]だからQ[私は「何が困るのか」と聞く]”という発話行為間の因果関係がみとめられるという点で、前件と後件が〈原因と結果〉あるいは〈理由と帰結〉という意味関係にあることを表示するという接続詞ダカラの本来の意味・機能との連続性が認められる。次の例では「聞き手にとって既知のものであるはず」という含みは弱く、ダカラが、「自らの発話内容が何らかの理由・根拠に基づくものである」という話し手の発話態度のみを表わしていると思われる。このタイプは(12)(13)などのタイプからさらに派生したものであろう。

(14) アノー、勇気がありすぎるんだったら、ぼくは、エート、マストに掛っている帽子を取ってから飛込むと思うんですよ。でも、取っていないでしょう？(ウン) 取ってない、ないのはですね、ですからアノー、こういうのは(勇気が)ない、エト、ないと思うんです。(ウン) だからそういうことから関係してね、気が小さいんだと。(気が小さい。あ、なるほど。) ですから気が小さいから、やっぱり、あの、ほかのことは考えられなくなってしまって、それでまあ上って行ってしまったんだから、やっぱり、… [録音器、()内は聞き手のあいづち]

こうした接続詞とはみなしがたい用法は、江戸語・東京語の口語資料では、ちょうどソレダカラからダカラに移行する江戸後期から見られ始める(小西 2003)。ソレの脱落とこの意味・機能拡張とは、無関係ではないと思われる。指示代名詞ソレが持つ前文脈照応という機能が十全に果たされている限り、上のような非接続詞的な用法は生れにくいと考えられるからである。

小西(2000)は、関西方言の談話資料の用例調査から、ソヤサカイ等の接続詞はもともと東京方言・共通語のダカラのような非接続詞的用法をもたなかったこと、また、最近の若年層では(断定辞では従来のヤを維持したまま)接続詞「ダカラ」を新用法とともに受容していることを指摘した。ところが、前田ら(2006)の質問項目を用いて西日本各地での原因・理由の接続詞の用法を調査してみると、従来の方言形式が非接続詞的用法でも使用可能と回答されることがある(この報告書所収の小西の報告など)。この結果は、上記の拙論の見解の修正をせまるものであるとも、従来の形式を維持しながら共通語のダカラの意味をとりいれて、方言と共通語との形式・意味の対応を単純にするという変化によるものとも考えられる。今後、他の方言談話資料や上方語資料の用例調査などによって、確認する必要がある。

また、東京方言のダカラについては、村中(1995)がその意味・用法と音調との関係を分析している。諸方言における「だから」相当形式の記述を行う場合にも重要な観点であろう。

3.2 ソレデ

先に、GA J 34・35 図では、岐阜などに語形成上「それ+で」に対応する形式が分布することを確認したが、このソレデ類の意味・用法がどこまで共通語のダカラの領域に入り込んだものなのかは、不明である。共通語の接続詞ソレデは、次のように後件の事態が話し手にとって事実である場合にしか用いられず、意志・推量・命令などはとりえないというモダリティ制限がある(岡部 1998 など)。

- (15) a. 謝礼は十分に出る。{だから/それで}, 私も引き受けた。
b. 謝礼は十分に出る。{だから/×それで}, 私も引き受けよう。
c. 謝礼は十分に出る。{だから/×それで}, 彼も引き受けたらう。

GAJの質問文「だから、するなど言ったじゃないか」の述部も、その事態が事実であるかどうか聞き手に確認する表現となっており、この文で共通語のソレデは用いられない。岐阜などにおいて「ソレデ、するなど言ったじゃないか」のような表現が可能なのであれば、共通語のソレデとは異なり、ダカラの意味領域に入り込んだものと言える^{注2}。さらに「判断の根拠」や「理由を表わさない用法」までを担うものなのかも確認したいところである。なお、ソレデについては、沖(2006)が、関西方言や長野方言において共通語のソシテの意味領域で使われるという、上で指摘したものとは別の意味拡張を指摘している^{注2}。

なお、久木田(1990)は、東京方言・関西方言の談話展開のパターンの差異を分析する際、ここでとりあげたダカラとソレデを、それぞれ東京方言・関西方言の談話展開を特徴づける形式とみなしている。また山口方言の「だから」相当形式が、談話においてどのような昨日をはたしているかを分析した住田(1988)の論もある。沖(2006)も指摘するように、接続詞は談話論(談話分析)においても重要な要素であるが、その方面での研究のさらなる進展のためにも、まずは諸方言の接続詞についての語彙論、意味論、文法論上の記述が望まれる。

注1 琉球では、語形成の詳細が不明なためにこの略図で割愛した回答にも「ソ系指示副詞＋する」を含むと思われるものがあつた。

注2 GAJでは「言ったじゃないか」部分の回答が記録されていない。もし述部が「言ったんじゃないか」のように「のだ」の確認要求表現であるなら、「[こうなることは予想された。それで言った] んじゃないか」のように、準体助詞「の・ん」のスコープに「PソレデQ」が含まれるという構造をとるものであり、ソレデの主節制限がなくなったとは言えない。ただ、そうだとすると、このソレデは共通語の「それで」の用法より広いと言えるだろう。

注3 ただし、沖(2006)が長野方言や関西方言の特徴としたソレデの「累加的列挙」の用法が、東京方言・共通語にないのか、筆者には判断できない。

付記 本稿で示したGAJの略図作成には、国立国語研究所「方言の部屋」のウェブサイトで開催されているプラグインソフトやデータファイルを使用した。また、本稿の記述内容に関しては、本研究プロジェクトのメンバーから有益な教示を得た。記して感謝する。

参考文献

- 伊藤曙覧編(1971)『越中射水の昔話：富山県射水郡』三弥井書店
- 井上文子(1995)「大阪府大阪市」山口幸洋編(1995)『全国方言資料研究テキスト』3
- 岡部寛(1998)「ダカラとソレデの違いについて」『現代日本語研究』5
- 岡本真一郎・多門靖容(1998)「談話におけるダカラの諸用法」『日本語教育』98
- 沖裕子(2006)「接続詞の文法化—気づかれにくい方言「それで」—」『方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究』(平成14年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究B 課題番号14310196 研究成果報告書)
- 久木田恵(1990)「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162
- 甲田直美(2001)『談話・テキスト展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房
- 国立国語研究所編(1983)『方言文法全国地図』第1集 大蔵省印刷局

国立国語研究所編(2003)『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成 第17巻 愛媛・高知』
国書刊行会

小西いずみ(2000)「東京方言が他地域方言に与える影響—関西若年層によるダカラの受容を例として—」
『日本語研究』20

小西いずみ(2003)「会話における「ダカラ」の機能拡張—文法機能と談話機能の接点—」『社会言語科学』
6-1

住田幾子(1988)「方言談話における接続詞のはたらき—山口県豊浦郡豊北町阿川方言の「だから」について—」
『日本文学研究』24

日本放送協会編(1966)『全国方言資料』第4巻 日本放送出版協会

蓮沼昭子(1991)「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4号

彦坂佳宣(2005)「原因・理由表現の分布と歴史」『日本語科学』17

日高水穂(2000)「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』無明舎出版

前田直子・日高水穂・小西いずみ・船木礼子(2006)「原因・理由表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック2』(平成14年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究B 課題番号14310196 研究成果報告書)

村中淑子(1995)「接続詞「だから」の音調について」『日本語研究センター報告』3 大阪樟蔭女子大学

用例出典(参考文献としてあげたもの以外)

- ・[吾輩] = 「吾輩は猫である」夏目漱石, 『CD-ROM版 新潮文庫明治の文豪』新潮社
- ・[人間失格] 太宰治, 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社
- ・[冬の旅] 立原正秋, 同上
- ・[シコ] = 「シコふんじゃった」周防正行脚本, シナリオ作家協会(編)『'92年鑑代表シナリオ集』映人社
- ・[録音器] = 『言語生活』172, 「録音器」欄

「だから（言ったじゃないか）」『方言文法全国地図』第34・35図より

《断定辞＋原因・理由の接続形式》

- ダ＋「から」相当助詞
(ダカラ, ダデ, ダケー, ダ(ー)スケア, など)
- ◎ ダ＋モンデ, ダ＋モンダ＋「から」
(ダモンデ, ダモンダデ, ダモンダイ, など)
- ジャ＋「から」相当助詞
(ジャカラ, ジャケー, ジャツデ, など)
- △ ヤ＋「から」相当助詞
(ヤクトウ, ヤリキ(ドウ), など)

《ソ系指示詞＋断定辞＋原因・理由の接続形式》

- ソレ・ソー類＋ダ＋「から」相当助詞
(ソレダカラ, ソレダデ, ソーダケン, ホンダカラなど)
- ◎ ンダ＋「から」
(ンダガラ, ンダサゲ, など)
- ソレ・ソー類＋ダ＋モンデ,
ソレ・ソー類＋ダ＋モンダ＋「から」相当助詞
(ソレダモンデ, ソレダモンダデ, ソイダモンダイ, など)
- ソレ・ソー類＋ソレ＋ジャ＋「から」相当助詞
(ソイジャケー, ソージャサカイ, ホンジャキニ, など)
- ンジャ＋「から」相当助詞
(ンジャガラ)
- ✕ ソレ・ソー類＋ジャ＋モンダ＋「から」相当助詞
(ソッジャモンダデ)
- ▲ ソレ・ソー類＋ヤ＋「から」相当助詞
(ソヤサカイ, ソヤカラ, ホヤヨツデ, など)
- ▲ ソレ・ソー類＋ヤ＋モンデ
(ソヤモンデ)
- ▲ ソレ・ソー類＋ナ・ニヤ＋「から」相当助詞
(ソナナカラ, ホナケン, ホンニヤキニ, など)
- ㄩ その他の《ソ系指示詞＋断定辞＋原因・理由の接続形式》
(ソガンアルケン, アッシジャンカラニ, ウガサーンキ, など)

《「した」＋原因・理由の接続形式》

- ☆ シタガラ, スタハンデ, など

《ソ系指示詞＋「する」＋原因・理由の接続形式》

- ★ ソガン＋スル＋ケン
- ◆ アンシ類＋「する」条件形＋バドゥ
(アンシバドゥ, アンバドゥ, アッシバトゥ, など)

《ソ系指示詞で始まる
その他の形式》

- T ソレデ類
(ソレデ, ソンデ, ソイデ, ホンデなど)
- Y ソレ・ソルなど＋「から」相当助詞
(ソルケン, ソイケン, ソレセンなど)

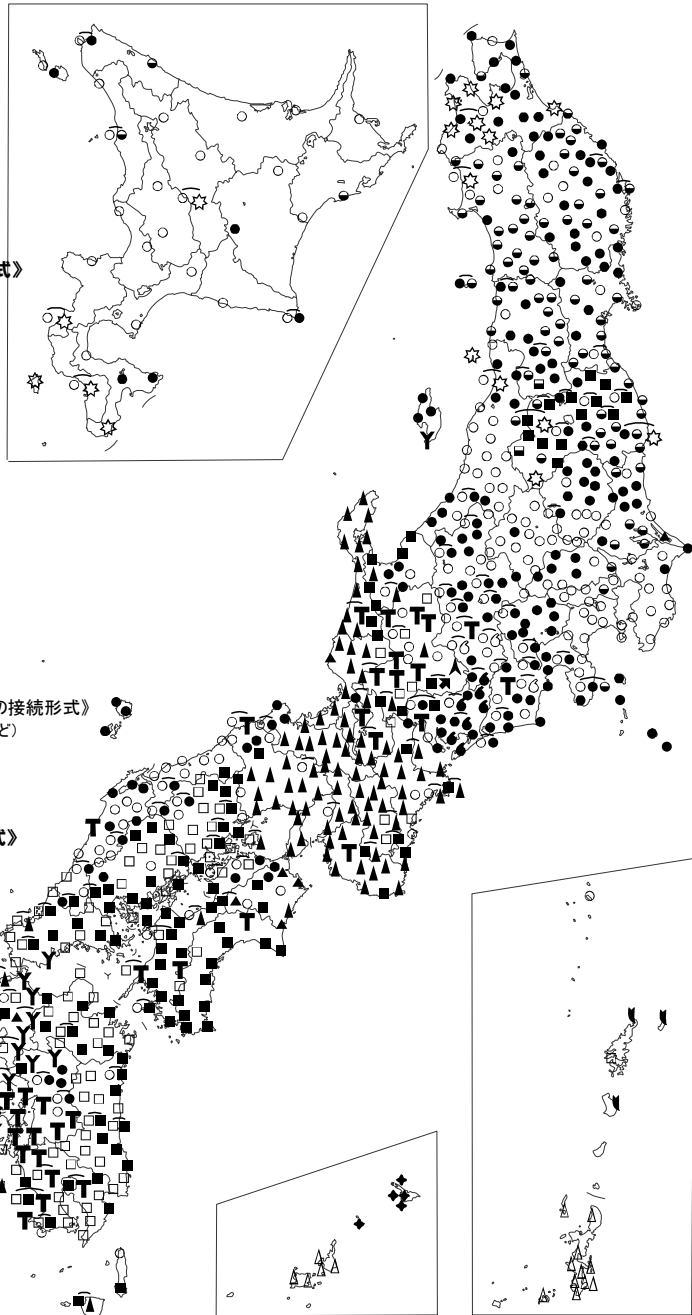


図1 『方言文法全国地図』第34・35図「だから(言ったじゃないか)」略図